
IS～インフィニット・ストラトス～死神の黒兎

曾良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス）死神の黒兎

【Nコード】

N5402Z

【作者名】

曾良

【あらすじ】

死神の名を持つ少年、赤神玄兎。ある事件の際に、ちょっとした興味本位でISを起動させてしまい、IS学園に入学させられてしまう。学校なんぞ行ったことが無い玄兎はIS学園でハチャメチャで・・・？

プロローグ（前書き）

思い付きで描いた作品です。最後まで読んでくださったらうれしいです。

プロローグ

「くそ暑いな・・・ここ・・・」

真っ暗な部屋の中に一人の少年が退屈そうに天井を眺めていた。まわりはコンクリートできており、さらに外のからの風が入ってくるのは、子供がギリギリ通れそうぐらいの窓ただ一つ。さらに、真夏の8月、コンクリートの熱気はものすごく、少年の体中から汗が噴き出している。

「もうちょっと、住やすくてできないもんかね・・・ここは・・・」

少年はそんな愚痴をこぼしなら、額の汗をぬぐう。ベっとりした汗に少年はすこし苦笑いする。

「ねーねー、風呂はいりたいー」

「風呂は2週間に1回だけだ」

少年は「けちっ」とだけ言うと、そっぽを向く。なんせ、この1週間お風呂に入っていない、自分が臭いの嫌だといい、駄々をこねているのだが、見向きもしてくれない大人たちに少年は心底がっかりしていた。

「はー、早く冬にならねえかなー」

冬になれば待ちに待った、外にいけるのだ。少年はそれだけが楽しみでしようがない。なにせ、2年ぶりの外のなのだ、これが楽しみなわけがない。

「楽しみだな、なんせ2年も出てないからな」

外に出たら、やってみたいことはたくさんある。それを、頭の中で思い浮かべているだけで、時間はあつという間に過ぎていった。

「いいか、外にいられる時間は1週間、一応資金として10万を渡しておく、無駄使いするなよ」

「わかってるよ、子供じゃないんだから……」

「わかってると思うが、お前は今」

「わかってるよ、そのことはちゃんと心に刻んでおきますよ」

少年はそういうと、その場急いで離れる。早くこの場を去りたかったからだ。何年いてもあの男たちは好きになれないからだ。こっちの意見は聞かず、まるでロボットのように動くからだ。そのような

男は少年

は好きでは無い。だからといっても、この場で何か事件を起こしては折角の機会を無駄にしてしまう。

だから、少年は大人しく今はこの男たちの言うことを聞いている。

男たちは少年を見送りという名の監視をしながら、少年を見ている。少年の走去っていく姿を見ながら、後ろに建っている施設に入っていく。

「さて……町に来たのは良いが……何をすればいいのか……」

少年はいきなり迷っていた。いや、迷つてなどはないだろう。元々どこに行くかも決めずに行動して少年にとって、道に迷うというのは違うのだ、そもそも少年はふらつときたらここに来た。それで、いいのだ、少年にとっては。

「どこだ……ここ……」

まわりはただの廃工場と廃ビルが佇んでいる、不気味な場所である。ここは、町とは全く別のところにあるのに来てしまったのは、ただ単に少年が某海賊の緑色の髪をした剣士ほど方向音痴だったのだ。

「誰か居そうだな……」

それは、完全に少年の勘だった。ここは町とは反対の方向にある廃工場だ、人などいるはずもなかった。

だが、少年はさっきまでの緩い顔ではなく、どこか敵を見つけたような顔つきで廃工場の中に入っていく。中に入るとそこは当時のままらしく、使われなくなった機械や材料などが山積みになっていた。

「これは……一体なんの施設だ？」

見たこともない機械、それはただの工場では扱っていないような代物だった。

「例……は……あ……か」

工場の奥から聞こえてきた声に少年はすぐに身構える。聞こえてきた声は常人なら聞き取れないほど遠くで行われていた会話で、少年はその声の方に近づく。近づくと段々と声がハッキリしてくる。

声からして、一人は女性で、もう一人は男性のようだ。

「例のものこれだ……」

男が女に何かを渡している、それは小さなもので少年がいる距離からは目視できなかった。男は施設にいた男で、女性の方は綺麗な金髪をしており、一般的に美人と言われる部類にはいるだろう。

「どうも……」

女はそれだけいうとこの場から立ち去ろうとする。それを男は慌てたように止める。

「おい、約束の金はどこだ？」

「なにそれ？そんなもの約束した覚えはないけど？」

「お前……われらを裏切るとはいい度胸だな！」

「裏切る？なんのことかしら、私たちがいつあなたたちのお仲間になったの？」

「貴様つ……！」

男は悔しそうに胸から拳銃をだし、それを女に向ける。

「そんなもので、この私を殺せるとでも？」

「なに！？」

女はすごい速さの蹴りを男の顔面にかます、男はその勢いで銃を床に落としてしまう。女は床に落ちた銃を拾いその銃を感度は男に向ける。

「くそ・・・貴様らただで済むと

」

「そいえば、言い忘れていたけどあなたのいたあの施設、今頃火の海でしょうね」

「亡国企業が・・・」

「じゃあね・・・」

バキュッンンン！

廃工場の中で銃声と薬莖が落ちる音が響き渡る。少年はそれを動揺ひとつせず、見ている。

しかし、少年は動かない。いや、動けない。今動いたら女のにばれる可能性があったからだ。迂闊に動けば殺されること間違いない、こちらには武器は無い。

(どうする・・・逃げるか？いや、下手に動けばこっちが・・・でも)

あんな状況を見て、無事に逃げられる保証もない。かと言ってもこのままじゃいつかはばれる。そんな少年の考えとは裏腹に女はこちらに気付く気配はまったくない。

だが

「そこに、いるのは分かっているのよ・・・出ていらっしやい」

女は少年の隠れてる方に銃を向ける。少年は観念したのか、両手を挙げた状態が出てきた。

「以外な人物ね・・・まあいいわ・・・どうせこの場で死ぬのだからね」

「けっ・・・どうだか・・・」

少年はこの状況に動揺ひとつせず立っている。死ぬかも知れない状況なのにその瞳には目の前にいる女を捉えていた。

「さすがは、《死神》と呼ばれただけはあるわね・・・この程度じゃ動揺しないか・・・」

「それはすまん・・・生憎俺はお前のような腰抜けではないのでな」

その言葉に女が一瞬だけだがピクリと反応した。

「随分強気な発言ね、自分の立場が分かってるのかしら？」

女は銃をこちらに向け、その指をトリガーに置き、引き金を引いた。

その瞬間だった。少年はその銃弾を躲し、女の懐に飛び込むと銃を女から奪い取る。

「くっ・・・いつの間・・・」

「すまんな・・・こちらとしては久しぶりの外なのに、1日目で死んじゃかなわんよ」

少年はそれをすぐさま解体し、遠くへ投げた。女は銃を取られたのにもかかわず余裕の表情だ。

「今日のところはこれで見逃してあげる、私も暇じゃないの」

「どっぴいっこと」

「

少年が言葉を紡ぐより先に工場内にもものすごい音とともにあるものが降ってきた。

「IS・・・・・・」

「それは、元々その男が渡したものだけど・・・・・・いらぬから返すわ」

「お前」

「

少年の言葉を待たず、いつのまにか後ろにとんでいるへりに乗り込む。

「くそ・・・待て！」

女は少年の言葉を聞かずにそのまま少年を見ている。そして、そのまま飛び去っていった。

少年は何事もなかったようつに、その場に座った。少年は目の前に映るISを見ている。

「ISか……使えたらあの女追えたのに……」

しかし、このISには少年には使えない。なぜなら、ISは女にしか反応しない。男である少年に使えるはずもないが、少年はなぜかISというもの触れたくなくなってしまった。ラファール・リヴァイヴ。これに触れたいという気持ちが心の底から湧きあがってくるのを少年は確かに感じてる。

「（触れたい！）」

だが、その時はちょっとした出来心でそれに触れた……。それが、少年の運命を左右することになるうとはこの少年は知らない。

その少年の名は赤神玄兎あかがみくろこまたの名を《死神の黒兎くろこね》

プロローグ（後書き）

この作品はちょいちょい更新していいのかなと思います。

感想や誤字脱字などがありましたらいつでも受付中です。

第1話 IS学園入学！（前書き）

2話目の投稿です。

駄文ですが最後まで読んでいただけたら、幸いです。

第1話 IS学園入学！

「なんだよ・・・ここは・・・」

玄兎は一人呟く、話を聞いたときにはここまでとは思わなかったからだ。後ろから突き刺さる、視線、視線、視線！周りからの痛いほどの視線が玄兎を追いつめていた。

（初めて学校というところに来たが・・・なんだ、この視線の数は！）

玄兎はほぼ全員からの視線を受けていた。これが、学校というものかと一人呻きながら、こうなった経緯を思い出す。

突然、変な男に連れて行かれ、気がついてみると・・・ここにいたのだ。当然、その時玄兎は全く理解できなかった。

当然である、突然連行 気がついたらここにいて 「入学おめでとう」

こんな感じで玄兎の理解が追いつく前に、今この場に放り込まれている。玄兎にしては「なにが起こったの？」という感じで、何もわかっていない。

分かっていることは、ここがIS学園ということだけだ。IS学園というのはIS操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また、黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また、

当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。

簡単に言えば、自分の国が作ったもんは自分たちで何とかしろや、そんなもってその操縦者の学校作れや、そして、その技術は見せるや、でも、お金は自分たちでだしてね。という某A国。玄兎曰く「殴りたい」らしい。

玄兎からすれば、こんな学校作らなければ自分も来ることもなかったのにー！らしい。

IS学園・・・つまり、生徒は必然的に女なのだ。しかも、全員。その視線を背中に受けているのだ、逃げ出したくもなるだろう。

しかし今年には例外がある、それは玄兎もだが、もう一人玄兎の前にいる、織斑一夏。唯一の救いはこの織斑一夏だけ。しかし、その織斑一夏も当然のごとく、クラス中の視線が集まっている。もちろんその中には玄兎も含まれているわけで、玄兎よりきついはずだった。

(にしても・・・これじゃ、珍獣扱いだ。俺はあの眉毛が特徴の珍獣ハンターとは勝負したことないぞ)

そんなことを言ってもこの状況を抜けられるわけでもなく、刻々と時間は過ぎていく。

ちなみに、今は自己紹介の時間で五十音順に自己紹介していったる。

「はい、次、織斑君」

「・・・・・・・・」

「織斑君！」

「……………」

「織斑君！織斑君！」

「おい、織斑、先生が呼んでる」

「え……あ、はい！」

玄兎の言ったので今自分が自己紹介の番だと気づく織斑一夏。さっきまで呼んでいた先生なんか涙目である。この本当に大人なのかというのを疑ってしまう、この人は玄兎たちのクラスの副担任、山田真耶先生

だ。緑色の髪をしていて、おちよっこちよいの性格で、ときおり子供なんじゃないかと思わしきときがあるが、この人は立派な大人だ。

「えーと、織斑一夏です……」

じー、玄兎以外の視線が一夏に突き刺さる。その目には「もつと言つてよ」「これで終わりじゃないよね」など期待が込められている視線だが、一夏にとっては槍で刺されているような感覚に襲われる。

そして、何を思ったのか、思いっきり息を吸い込み。

「
以上です！」

ガタタタタタタタタタタタタタタタタッ！

ひな壇の芸人顔負けにズッコケる一同、一夏、玄兎だけが意味が分からずに頭の上にハテナマークをつけている。

ドスンっ！

「自己紹介もまともにできんのか？」

「げえっ、千冬姉!？」

バシンッ！

もう一発一夏の頭の上に出席簿という名の悪魔の武器が振り下ろされる。それはもう、普通の人間ができるものではない………よ
うな気がする。

「私がこの1年1組を受け持つことになった、織斑千冬だ。私の仕事は15歳を若干16歳まですることだ、私の問いには「はい」か「イエス」で答えるいいな」

悪魔……あるいわ鬼、その二つより恐ろしい。だが、千冬はツッコミの余地を与えない。

だが、次の瞬間、一夏も玄兎も知ることになる。IS¹¹¹学園の恐ろしさ……。

「きゃあああああ」

「千冬様——」

「本物だわ~~~~」

「かつこいいー」

「私を罵って——」

最後のは確実におかしいだが、いつもの事なのか千冬はそこまで驚く表情は見せなかった。逆にやれやれといった表情だ。

「で・・・お前はるくに自己紹介もできんのか？」

「いや、それは千冬姉

」

バシンッ！

「織斑先生だ・・・」

「はい・・・織斑先生・・・」

再び一夏の頭に出席簿が振り下ろされる。しかし、一夏の不用意な一言は女子は聞き逃さなかった。

「今、千冬姉って……」

「もしかして、織斑君って千冬様の弟？」

一気に知れ渡る。この調子ならこの学園中に広まること確実だろう。再び頭を抱える千冬、そして、叩かれた場所をさすっている一夏はそう確信した。

「で……いつまでそこで寝てる気だ……」

バシンッ！

いつの間に寝てる玄兎を出席簿で起こす千冬。すると、玄兎は大して痛がる様子もなく起き上がる。

「えっと……俺の番ですか？」

「そつだ、自己紹介しろ」

「えーと、赤神玄兎をです。よろしくお願いします」

当然、玄兎にも一夏同様の視線が飛んでくる。しかし、何を喋ればいいのかわからない。

(よし、次に頭に浮かんだのを言うか)

仕方なく、玄兎は次に頭に浮かんだことを話すことにした。だが、それは決していい言葉ではなかった。

「
以上です!!」

ガタタタタタタ………つ!

再び芸人顔負けのズッコケが起こる。玄兎はただ、一夏の言ったことを真似ただけで何の悪気もなく、なぜみんなこのようなことをするのかわからなかった。

「なんで、皆ズッコケるんだ？」

数秒考えて、わかったのか玄兎は納得した表情になり、

「そうか……みんな、足腰弱いな！」

ガタタタターーーーッ！

本日二度目のズッコケ。さっきの言葉を満面の笑みで言う玄兎に何も言えない千冬と一夏であった。

2時間目の授業が終わり、一夏は早速玄兎のところに来ていた。もちろん、この学園唯一の男子なのだ、仲良くしないわけではない。

「俺は織斑一夏、一夏でいいぜ」

「じゃあ、俺も玄兎でいいぜ」

お互いに名前は覚えていた。お互い男子だということもあるが、あの強烈な自己紹介のせいでこの二人の名前はこのクラス全員が嫌でも覚えたのだ。もちろん女子たちにとつて男子を嫌い理由はない。しかも、二人ともイケメンなのだ。そのためか、先ほどの時間は玄兎と一夏が話そうとした時は、一夏の幼馴染という子に一夏を取られてしまい、一人取り残された玄兎は質問攻めにあっていた。

「好きな食べ物は？」

「嫌いな食べ物？」

「好きな女の子のタイプは？」

「彼女いる？」

とかだ。玄兎にしてみればどうでもいい内容だった。でも、女子のあまりの勢いに圧倒されていた玄兎だった。

「一夏・・・女子って怖いな・・・」

「そうだな・・・」

一夏も一夏で何かあったのだろうか、苦笑いを浮かべている。

「あ・・・お前さっきの子って、もしかして彼女？」

「さっきの子？ああ、箒か・・・違う違う、ただの幼馴染だ」

「へー、そうなんだ・・・」

「夏は気づいていない、その幼馴染からとてつもない殺気が飛んでいることを・・・」

「ちょっと、よろしくって?」

「夏達のうしろから声をかけてきたのは、どこか特徴的な金髪をしている女子だった。」

「え・・・?」

「ちょっとなんですの? そのお返事は、わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度があるのではないでしようか?」

「夏も玄兎も正直これには困っていた。二人ともこのタイプの人間は嫌いなのだ。このいかにも『今の社会』を象徴したような女の子。今の世の中はISの登場で男尊女卑でなく、女尊男卑なのだ。女にしかI

Sは使えない、ISは既存する兵器のなかでは間違いなく最強、当然どの国も女性を優遇する。そして、あつという間に女尊男卑の風潮は全世界に広がり、この女子みたいな人たちが増えてきた。今じゃ、町の中で普通にパシリをされている男を見かけるほどになっていた。

「ちょっと、話を聞いていますの?」

「え・・・あ、ごめんな。なんて話だっけ」

玄兎は正直なことを話した。だが、それが逆に怒らせる結果になった。

「もう一度言いますけど、このわたくしに話しかけられるだけでも、光栄なのでから」

「そうか、それはコウエイダー」

「なんで、棒読みなのかしら？」

「ソナナコトハナイヨ」

玄兎なりの場を和ませるためのジョークのつもりだったのだが、女子はさらに顔を真っ赤にして怒ってくる。

「馬鹿にしていますの？」

「そんなことないって……なあ、一夏」

「う……俺に振るなよ」

一夏はあからさまに嫌そうな顔を浮かべている。

「ごめん、正直君のこと知らないし」

「知らない！？このイギリスの代表候補生であり、入試主席のセシリア・オルコットを！？」

「オセロット？」

「オルコット！わたくしはリボルバーを持ってなんかいません！」

「いいセンスだ」

某ロシアのガンマンのセリフを言い終わると、玄兎は話を本題に戻す。

「話が逸れましたが、ようするにエリートのこの私を知らないのですか？」

セシリアはどうやら横で「代表候補生って何」と聞いている一夏に對して言ったらしく、一夏はなるほどと相槌を打っている。

「大体、あなたISのことについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いてましたから、少しくらい知的さを感じさせるかとおまっけてましたけど、期待外れですわ。」

「俺もなのか・・・？」

「当然ですわ！」

電話帳と間違えて、参考書を捨てるやつと一緒にされたくない！それが、玄兎の今言いたいことだが、それを言ってしまったらややこしくなりそうはやめた。

「まあ、ISのことではわからないことがあつたら教えてあげてもよくてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒した、エリート中のエリートですから。」

それで、機嫌よくなったのか、セシリアには胸を張って玄兎達を見下ろしていた。

「入試ってあれか？IS動かして戦うやつ」

「それ以外入試はありませんわ」

「ああ、それなら俺も倒したぞ。教官」

意外な一夏の言葉にセシリアは目を丸くしている。当然のことだ、代表候補生ならまだしも、まだ1回しか動かしてない一夏教官を倒したというのはすごいことなのだ。だが、その価値に約2名ほど気づいてない。

「わ……わたしくしただけだと聞いていましたけど？」

「女子ではって落ちじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……」

「いや知らないけど」

「あなた！あなたも教官をたおしたと言っの？」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん！？たぶんってどっついう意味かしら」

「えーと？落ち着けよ……な？」

セシリアのあまりの怒りっぷりに、玄兎と一夏はなだめようとしているが、顔を真っ赤にしてまだ怒っている。一夏の言葉が相当来たんだろうなと玄兎は一人苦笑いをしていた。

「これが落ち着いていられ・・・」

キーンーコーカーン。

話に割って入ったのはチャイムだった。

「っ・・・！！またあとで来ますわ！逃げないことね！」

そう言うと、セシリアは席に戻っていった。

「一夏・・・ガンバ！」

「困ったときに俺に振るのやめろよ・・・」

こうして、今だ状況がつかめない一夏と、内心楽しんでいる玄兎は再び千冬の授業に戻るのだった。

第1話 IS学園入学！（後書き）

どうでしたか？セシリアさんの登場。さあ、彼女はヒロインなのか！？

次回もセシリアとの喧嘩？らしきものは続きますww

感想、誤字脱字などありましたら随時受付中ですのでよろしくお願
いします。

第2話 Angst (前書き)

今回はセシリア戦の前の話です。

駄文ですがよろしくお願いします。

第2話 Angst

「それではこの時間では実戦でも使用する各種装備について説明する」

1時間目と2時間目の授業と違い、教壇の上には山田先生ではなく、千冬が上っている。玄兎もこれまでの授業で千冬の恐ろしさを目の当たりにしているので、内容は理解しているが真面目に授業を受けている。

「そつだ、再来週のクラス対抗戦に出るものを決めないといけないな」

千冬は思い出したように言うと、希望者を聞いていく。クラス代表とはそのままの意味で、一般的のクラス委員と同じで、生徒会の開く会議や委員会に出席などごく普通のクラス委員と一緒だが、ここはISS学園なわけで当然、クラス対抗のリーグ戦にクラス代表として出場しなければいけない。

普通の場合は当然女子が代表の訳だが、今回は例外が約2名いるわけで当然皆もそっちの方に話題が行ってしまう。

「織斑君を推薦します」

「じゃあ、赤神君を推薦します」

こういう風に男子を推薦したいわけで、だが、男子二人はそんなこと知ったこっちゃないというわけで、

「なんで、俺!?!」

「一夏は良いが、なんで俺まで推薦されなきゃいけないんだよ！」

当然のごとく猛講義。しかし、それは鬼によって防がれてしまう。

「うるさい、推薦された物に拒否権はない」

「お、鬼かよ……」

ギンツ！鋭い目つきで玄兎を睨みつける。その目つきは例えるなら研ぎ澄まされた刃である。

目の前にいる鬼の前になすすべなしの男子二人、しかし、そんな男子の前に救いの手が差し出された。

「ま、待ってください。そんなこと認められません！」

勢いよく立ち上がったのは、先ほど一夏と玄兎と喧嘩をしていた

「そのような選出は認められせんわ！大体男子がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくし、セシリア・オルコットに1年間そのような屈辱を味わえとおっしゃるんですか！？」

「恥って……」

「いいですか、クラス代表というのは実力のある方がなるのが当たり前でしょうか？それなら、このイギリスの代表候補生である、わたくしがなるのが当然でしょうか？それを物珍しいからと言って、極東の猿にさ

れては困ります。わたくしはこのような島国にまでISの鍛錬に来たのであって、サーカスをする気はもっとうもありません」

「そうだーそうだー……って、俺たちは猿じゃないぞー」

「あなた、さつきからうるさいですわよ！大体文化としても後進的な国で暮らさなければいけないというだけでもどれだけ苦痛かと

」

「イギリスだって、大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

セシリアの言うことを遮ったのは、一夏だった。

「あ、あなた祖国を侮辱しますの？」

覆水盆に返らず、こつなつては誰も止められない。

「け、決闘ですわ！」

「おう、四の五の言うよりわかりやすい！」

「さて、話は決まったな。それでは勝負は一週間後の月曜放課後、第3アリーナで行う、織斑とオルコット、赤神は準備しておくように」

「俺まで！？」

「当たり前だ、推薦された者に拒否権はないと言ったはずだ」

「こじやって、一夏とセシリアの決闘が決まった、玄兎を巻き込んで
。。。」

放課後、玄兎と一夏は今日のこと振り返っていた。なにせ、このI
S学園始まって以来、初めての男子ということで一夏と玄兎が移動
するたびに、行列ができてしまう。昼休みや昼食の時はこれでもか
というぐらいに玄兎のまわりには女子がいた、ちなみに一夏は幼馴染
染の篠ノ之箒と一緒にいたからあまりついていく女子が少なかった。
その代り玄兎のまわりにはかなりの数がいたことは一夏は知らない。
。。。

「今日は疲れたー、にしても俺たちはパンダかよ。。。」

「ああ、パンダの気持ちが分かった気がするぜ」

「あ、織斑君と赤神君まだ教室にいたんですか、よかったです」

声の主は山田先生だった。

「寮の部屋割りが決まりましたので、あ、これ鍵です」

一夏の部屋は1025室、玄兎の部屋は1026室だった。

「お、お隣さんだな」

「そうだな」

「それより、荷物を取に帰らないといけないな」

「それなら心配はない。私が手配しておいた。ありがたく思え。生活必需品だけでいいだろ」

いつの間に千冬が真耶の後ろに立っていた。しかし、年頃の男のはそれでは少ないような気もするが……………。

「あ、織斑先生、話良いですか？」

「ああ、いいが……………」

玄兎はそのまま千冬と共に教室から出ていく。

「どうだ、お前から見てここは・・・」

話をすると行って千冬と玄兎は人気のない廊下に出ていた。

「いいところですね、でも、ちょっと疲れそうですね」

玄兎はちよつとおどけたように言うと、どこか懐かしいそんな顔で・・・。

「すみませんね、俺なんかをここに入れてくれて・・・」

「ふん、ラウラからお前のことを聞かされていたからな」

「本当に感謝してますよあなたには・・・ラウラ元気ですかね」

「元気さ・・・あいつの事だからな」

「くっしゅん」

「風邪ですか？隊長」

「いや、大丈夫だクラリツサ」

「それは、誰かが噂しているのでは？」

「ああ、でも誰が？」

「たとえば・・・織斑教官とかですかね・・・あ、もしかして玄兔さんかもしれないですよ」

「そういえば・・・玄兔も日本にいたったな」

「懐かしいですね、それと同時に羨ましい」

「なぜだ？」

「日本といったらなんといっても、秋葉原でしょう！いいですが、まず日本というのは」

それからクラリツサの講義が1時間続いたとか……。

「どうせ、クラリツサが暴走してますよ」

「そ、そうだな……」

二人とも苦笑いしかできない、あの独特すぎる部隊《黒ウサギ隊》のことを思い出すと少し笑いたくなる。

「それでは、俺は帰りますね」

「ああ、話はそれだけでいいのか？」

「ええ、あいつらの話を聞けただけでもよかったです」

それだけ言つと、玄兎は踵を返し去っていく。

「俺の部屋は……ここか……」

千冬と別れた後、玄兎は早速寮の自分の部屋へと向かっていた。1026室、一夏のすぐ隣の部屋である。男がすぐ近くにいるのはありがたい、女子しかいないIS学園、必ず男子の部屋には女子が群がってくるだろう。そのことを考慮しての部屋割りに違いない、そう玄兎は思っているが、実際は適当にきまったのが真実……。

「おーやっぱすげえな、ここは……」

部屋には高そうなベットが2つ並んでおり、どこの高級ホテルば

りの部屋なのである。

「ふかふかだー、気持ちいいな、これ」

ベットに寝転がると気持ちよくて眠りそうになるが、玄兎は寝ない。昼寝をしたら夜寝れなくなるからしいが、実際のところベットに入ったら昼寝関係なく寝るのはここだけの話。

「そうだ・・・一夏の部屋に行こう」

別に何の用事もないが思い付いたら行動するのが玄兎だ。しかも、一夏は隣の部屋、すぐに行ける距離だ。玄兎は一夏の部屋のドアをノックし、入ろうとしたとき、いきなり一夏が飛び出してきた。

ズドッ！

「なんだいきなり・・・」

玄兎は咄嗟にドアから出てきた、木刀を掴む。

「大丈夫か玄兎？」

「これが、大丈夫に見えるか？」

それもそうだと納得する一夏。理由は玄兎が木刀を片手で掴み必死に対抗していたからだ。

「箒、それぐらいにしろよ。玄兎が！」

すると、木刀はスッと部屋の中に戻っていく。

「なんだっただんだ・・・あれは？」

「あれはな・・・気にするな」

「それは無理だろ！いきなりあんなもんで突かれて、気にするなは無理だ」

「それもそうだけど・・・今日のところはごめんな」

「一夏・・・いいぞ」

一夏は誰かに呼ばれ中に入っていく。一人状況についていけない人が1名。

「誰か・・・説明してくれーーーー」

時刻は夜の10時、空は真紅の夕焼けから漆黒の夜空へと変わっていた。

「さて・・・セシリアだっけか、あいつの対策を始めますか・・・」

場所は玄兎の部屋、玄兎は一人でパソコンを見ていた。その画面にはあるもののデータが映っていた。

「ブルーティアーズ。射撃特化の第3世代か・・・」

イギリスの代表候補生であるセシリアの専用IS『ブルーティアーズ』ブルーティアーズ 操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた第3世代の兵器、BT兵器を搭載した機体。

そのデータを見ながら玄兎は頭の中で来週のセシリア戦のことを考えていた。本当のことを言うと言わぬ気は全くない、なぜ自分がこんなめんどくさいことをしなければいけないのかと思っただが、セシリアを見たときからどこからか闘志が湧いてくる。今の世界を象徴としたような女、それが玄兎には許せなかった。だから、一夏の反論は嬉しかった。一夏もその辺にいる男どもと同じやつだったら玄兎はがっかりしていただろう。しかし、一夏はそういう男ではなかった。真つ向からあのセシリアの勝負を受け、さらにハンデ無しとまですったのだ、まさに天晴と叫びたいくらいだった。

玄兎は昔から人を見下した奴が大っ嫌いだった。権力者の息子だからというだけで威張ったり、男だからと女子を見下したりとそういう風なやつを見ると腹が立ってしょうがなかった。ISが登場してから、世界は男子女卑だったのが、女尊男卑になった。これで、少しずつ世界は変わるだろうと、玄兎は少なからずそうなると思っ

ていた。だが、違った。ISが女にしか使えないから当然のごとく国は女子を優遇する、すると、今度は女子が男子を見下した態度を取るようになった。それは、仕方がなかったのかもしれない、世界は大昔から男尊女卑だったのだ、そのツケが来たと思えば玄兎はそこまで苦ではなかった。

でも、世界はやりすぎた。やりすぎたため女は付け上がり、あのセシリアのような者を生み出した。しかも、それをISの開発者である、篠ノ之束に押し付けて。

東博士は確かにものすごい発明をした。だが、それは兵器ではない。飽くまでも宇宙空間を想定したマルチフォームスーツとしてだ。それを世界は兵器として使おうとした、だが、それは篠ノ之束の意向により、断念されたはずだった。

あの日、玄兎が初めてISに触ったあの日見たことは今でも鮮明に覚えている。金髪の女と玄兎がいた組織の男、少なくともあのどちらもISを持っており、それをスポーツ以外の目的に使おうとしていた。玄兎はあの後あいつらのことについて調べようとしたが、どうやっても何もわからなかった。

┌

あの女から放たれていたあの冷たく鋭い視線、千冬とまた違う目、どちらかと言えば玄兎と同じ目をあの女はしていた。内面穏やかな顔をしていたが、瞳の奥には確実に殺気があった。今思えばなぜあの時、あんな場所に行ったのか後悔してしまう。あんな場所に行かなきゃこんな目に合わなかっただろう。しかし、過ぎたことを後悔しても遅い。今は今やるべきこと頑張るしかない。

玄兎は持ってきた道具をあさり、その中から金庫をだす。暗証番号を入れ金庫を開け、その中からあるものを取り出す。暗証番号の中から出したものは、黒い眼帯。

「力……か……」

確かにあの時力があればあの女を逃がさずに済んだのかもしれないが、力とは時に人をおかしくさせる。大きすぎる力は時として大きな脅威となる、それに使いこなせる器が無ければいけない。

「俺なんか、あんなもの……」

玄兎がここに来る前に出会った一人の女。いきなり現れ、気づくとどこかに行ってしまった。どこに行ったのだろうか？それは、今でも玄兎の中にある一番の疑問でもある。

その女が渡したある物、それは《力》、大きすぎる力だ。

玄兎は大きな《力》を嫌う、というか怖い。

「俺なんか持ってたなら、誰かをまた傷つけてしまう……」

それは遠い昔の出来事、だが、思い出したくもない記憶だ。もう誰も傷つけたくはない、だからこそあの施設の入っていたのだ。しかし、その施設もない、誰も自分を止められる者がいない、

「あ……でも、織斑先生だったら……」

さすがにあの人の前では嫌でも何もしないだろう。しかし、力が無ければ何もできない、誰かを守れることも、誰かを助けることも……。

「なら、決まってるじゃないか……今度こそ何も失わない、いや失いたくない」

そう言つと眼帯を丁寧にしまい、セシリア対策に戻つた。

第2話 Angst (後書き)

次はセシリア戦(のはず・・・)はたして、結果は!?

感想、アドバイスをいつでも受付中です。でよろしくお願ひします。

第3話 代表決定戦 / First battle (前書き)

今回はVSセシリア戦！

駄文ですがよろしくお願いします。

第3話 代表決定戦 / First battle

「なあ、箒……」

「……………」

「目・を・そ・ら・す・な！」

1週間は意外に短い、玄兎はセシリアの対策をしていたら、あつという間に対戦当日になった。一夏はというと、1週間の間ずっと箒と一緒に剣道をやっていたらしい。今回一夏が起こってる理由はそこにある。

「ISのことを教えてくれるんじゃないかったのか？」

「仕方ないだろう、お前のISも届いていなかったのだから……」

箒は一夏に対して『ISの事は私が教えてやる』と言ったそうだが、その後剣道やったら、昔より弱くなってるので、その稽古をしていたらあつという間に1週間経ってしまった。

「よう、調子どうだ？」

「ああ、ばっちりだ」

一夏と箒が話していると玄兎が入ってきた。玄兎もこの1週間セシリアに勝つため頑張ってきたのだ。ISを動かし、セシリアの機体《ブルーティアーズ》のデータを見て、みっちり対策はした。

(まあ、機体の性能はあっちの方が断然上だがな……)

一夏の方には専用機を用意するらしいが、玄兎の方は玄兎の方から断った。断ったというより拒否したという方が近いのかもしれない。世界で2人しかいない男性のIS操縦者、当然のごとく専用機の話は玄兎にも来た。だが、玄兎はそれを断固拒否した。理由はいらない。ただそれだけだった。

「玄兎も試合頑張れよ」

「おう、セシリアに一泡吹かせてやる」

今日の試合、セシリアとのクラス代表をかけたの試合。本当は一夏も玄兎もクラス代表なんてやりたくない。だから、今回の試合は男としての、男代表として戦う気持ちで玄兎も一夏も臨んでいる。

「赤神君、赤神君！」

声の主はピットの入り口から玄兎の名前を叫びながら、走ってくる真耶だった。今にも転びそうな勢いで走ってくる真耶を冷や冷やしながから見つめる一同。一夏達のところに来たころには、肩で息をしていたほどだった。

「あ、はあはあ……赤神君もうすぐ試合時間ですよ……」

「あの……大丈夫ですか？」

「え……大丈夫……です」

どう見たって大丈夫じゃない、それが、玄兎や一夏達の感想だった。

「そうですね……一夏……行ってくるな」

「おう、勝ってこい！」

玄兎と一夏はお互い握り拳を作り、それを互いに合わせる。

そう言いつと、一夏より先にピットに入り玄兎は準備を始めた。

「赤神……気分はどうだ？」

「悪くはないです」

ISを装着した玄兎は率直な感想を述べる。わるくは、ない。それが、今の玄兎に言えることだった。

今玄兎が使おうとしているのは、『打鉄』日本製のISで防御力が高い。第2世代の中では扱いやすい方であり、このIS学園に配備されているISは殆どがこの『打鉄』である。今回は特別に織斑先生に無茶言っつて、通常『打鉄』には近接ブレードしか装備されていない。だが、これに荷電粒子砲を特別に装備してもらったのだ。今回の相手は最新機の第3世代なのだ。いくら実験機だとしても第2世代で勝つのは厳しいだろう。

「今回はこつちも無理をしたんだ、勝てよ」

最後の言葉に異様な威圧感を感じ、ちよつとだけだが冷や汗が額から頬を伝い下に落ちる。

「そうですね・・・さて・・・行きますか」

そう言うと玄兎は射出用カタパルトに移動する。IS学園のアリーナのピットから出る場合はこのようにカタパルト使わないといけない。

「じゃっ・・・行つてきますね！」

玄兎は勢いよくカタパルトを離れ、セシリアの待つ場所へ飛び出して行った。

「逃げずに来ましたね」

「逃げるわけないだろ、一応俺は紳士だからな」

「あら、随分口の悪い紳士ですわね」

お互い試合の始まる前に早速言い争いを始めた。ただ言い争いをしているわけではない、玄兎はちょっとしたでもセシリアを怒らせることが目的なのだ。セシリアのISは主に射撃武器を使う。スナイパーは常に冷静ではなくてはいけない、セシリアのようなタイプはすぐに熱くなって、我を失うタイプ。つまりそこをつこうというのが、今回の玄兎の作戦なのだ。

「お前こそ、逃げなくていいのかよ？俺は強いぞ」

「その心配はされなくてよろしくてよ」

「そうか……なら……」

警告、敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認。初弾工
ネルギー装填。

玄兎のISのハイパーセンサーがセシリアが攻撃態勢に入ったと伝える。

一方玄兎の方もいつでも動けるように準備する。

「絶対に勝つ（勝ちますわ）」

「すごいですね赤神君・・・」

ここは、アリーナのモニター室。普段ここは先生しか入れないが夏達は千冬と真耶と一緒に、こっやってセシリアと玄兎の試合を観戦している。試合はセシリアの優勢だ。

「赤神君、どこかで訓練でも受けてるんでしょうか？」

「いや、あいつの場合は恐らく、ハイパーセンサーよりも先に動い

て回避しているのだろう」

千冬はさらっと言ったが、冷静に考えればすごいことなのだ。つまり人間の何倍の速さで情報が送られているハイパーセンサーより、普通の人間の玄兎の反応速度の方が早いのだ。どちらかと言えば玄兎の反応

スピードにISの方が追いついていない。

「でも、そんなこと可能なんですか？人間の方がISの反応速度の方が早いなんて……」

「戦闘で磨き上げられた《勘》なのかもしれない、あるいは今までの経験から身に着いた《生きるための技術》^{スキル}かもな」

「勘……ですか……？」

「でも、織斑先生、たとえ勘だとしても……」

「それだけのものだったのかもしれない、あいつの経験してきたのかもしれない」

それだけの経験……それが、玄兎の《勘》というものの根本なら、玄兎は過去にどんな経験をしたのかそれだが、千冬を含め全員のご感想だ。

「でも……それでも、玄兎の勝つ確率はあるんですか？」

一夏の質問だ。たしかに、いくら玄兎が優れているように、操縦しているISがそれについていけないのなら意味がない。いくら優れた腕のある剣士でも、刀が鈍らだったら何もできない。それと一緒

で、いくら優れた者でも、使うものが駄目だったり、いくら優れた物を使ったところで、それを使う人が使いきれない場合、それもその物本来の力を発揮できない。

玄兎の場合は前者だ。いくら身体能力が優れていようが使うものが駄目なら、その能力も発揮できない。

逆にセシリアは後者だ。第3世代という物を使いながら、いまだに玄兎を仕留められない。

セシリアは《ブルーティアーズ》の本来の力を発揮できていない、つまり乗りこなしてはいない。だが、セシリアの場合は代表候補生という特別なケース。つまり、ISを使っている時間は玄兎よりはるかに長い。それは、玄兎にとって不利なことであると同時に希望でもある。

セシリアは玄兎が男であること、それに、使っているISが第2世代あることと、なにより自分が代表候補生だということで、油断している。そこを突けば何とか玄兎にも勝機がある。そう玄兎は思っていた、だが、これには弱点がある。それは、武器。つまり、その方法では確かに一撃ぐらいは入れることができるだろう。だが、その後はセシリアもそのことに注意しながらやるだろう。つまり、玄兎がセシリアに攻撃できるとしたら、それは多くても1回が限度。玄兎にこの試合で求められるのは、『一撃必殺の攻撃』なのだ。それを、この1週間玄兎はそのことをずっと考えていた。

『よくここまで、持ちこたえましたわね……。でも、これでフイナールでわすわ！』

セシリアは全てのBT兵器《ブルーティアーズ》で攻撃している。

それを紙一重で躲す玄兎。

「玄兎……」

一夏はただそれをじっと見ているだけだった。

「よくここまで持ちこたえましたわね」

「それりゃどうも」

お互い余裕の表情であるが、玄兎の場合余裕でいられる状況ではない。さっきのピットの攻撃によって、シールドエネルギーの大半を保持していたのだ。

それに、セシリアは玄兎との距離を一定の距離を保ちながら攻撃してくる。それを躲し続ける玄兎。

セシリアに接近できなければ玄兎の攻撃は通らない。玄兎は試合開始から攻撃出来るチャンスを伺っていたが中々来ない。

「待つても駄目なら・・・こつちから行くまでだ！」

玄兎は次は自分からセシリアに突っ込んでいった。セシリアは相変わらずに玄兎と一定の距離保っている。玄兎はピットの攻撃を紙一重で躲しながら、チャンスを待つ。

「やりますわね・・・ですが・・・これで！」

セシリアは《スターライトmk2》を構え、それを玄兎目がけ放つ。その瞬間、最低限の動きでそれを躲し、そのまま加速を行う。一瞬で最高速度になり、セシリアの前へ一気に飛び込む。そして、そのままのスピードで近接ブレードを振り下ろされる。

「くっ・・・」

「まだまだー！」

玄兎の攻撃はまだ止まない。そこから、左腕に装備されている荷電粒子砲を2発セシリアに放つ。

そのまま、玄兎はさっきの加速もう一度行い、再びセシリアの懐に飛び込み、腹部に近接ブレードを突き立てる。さらに、その状態で荷電粒子砲を放ちながら落下していく。

「小癩なっ！」

玄兎は背中に大きな痛みが走るが、それも気にせず攻撃を続ける。

玄兎の攻撃でセシリアが負けるのが先か、それともセシリアの攻撃

で玄兎が負けるのが先か。

ズドゥンンンンン！

強い衝撃がアリーナを襲う。玄兎達の落下でアリーナの砂が巻き上げられ、アリーナを覆い尽くしていた。その砂煙でアリーナは目視では何もわからない状態であった。

徐々に砂煙が晴れていく中に一つだけ影が立っていた。

『試合終了。勝者』

試合が終わり、意気消沈でピットに帰ってくる玄兎。試合前にあれだけ啖呵切ったのにあれでは格好がつかない。玄兎を出迎える一夏と箒の表情はすこし残念そうな顔だった。

「お疲れ玄兎」

「中々頑張ったな、赤神」

「ああ、ありがとう一夏、それに篠ノ之さん」

「箒でいいぞ」

「なら、ありがたく……ありがとう箒」

「次は一夏だな……頑張れよ」

「おう、お前の仇は取ってきてやる!」

「死んでないがな……」

そんなこと言ってるであっという間に一夏の試合の番になった。

「まったく、あれだけ言っておいて……なんだこれは?」

「すみません……」

「言い返す言葉もないっす……」

二人の試合終了後、二人は千冬からの説教を受けていた。一夏の試合は惜しいとこまでいったが、結果は負け。今では玄兎も一夏も試合前あんな台詞を言っていた自分たちが恥ずかしいと思っている。

「まずは、赤神」

「はい！」

「お前は自分から攻撃しに行かず、その結果自分から行くがシールドエネルギーが足りずに敗北」

その通り、玄兎が最初から自分で攻撃に出れば、すこしは戦況は変わっていたに違いない。

「次に織斑！」

「はいっ！」

「お前場合はシールドエネルギーの残量も見ず、その結果雪片の能力で自滅……」

一夏はあの後、専用IS『白式』が届き、それで戦ったが……その武装は《雪片型式》だけで、その能力『バリアー無効化攻撃』が備わっている。それを使えば戦況を逆転させることが可能だが、それはも

る刃の剣でもある。その能力を使えば、代わりにシールドエネルギー

―を消費するといふものだったが、一夏はシールドエネルギー残量無視でその攻撃を行い。負けた。

「まあ、今回は初めての实战だからな、勘弁してやるう」

内心はかなり喜んだ二人だが、それを表に出せば殺されるだろうから、表に出すのは留めた。

「それとだが……赤神、お前試合中にやったあの加速はどこで教わった？」

「加速……ああ、あれは……実はというとあれどうやってやったか、分からないんですよ」

「つまり……偶然だと……」

「はい」

千冬は心の中でかなり驚いた。玄兔が試合でやって見せた加速、あれは瞬間加速イグニッションブーストと言われるもので、上級者であれば誰でも使えるが、ISを使つてまだ、ちょっとしか経たない者が偶然で発動させたのだ。しかも、2回も。

一夏と玄兔の背中を見ながら、千冬はそんなことを考えていた。

「天才……もしくは、それも《生きるための技術スキル》なのか？」

その答えは恐らく誰も知らない。

第3話 代表決定戦 / First battle (後書き)

さて、次回はいつになるのだろうか・・・？

次回はあのチャイナ娘登場・・・かも知れない・・・。

感想、アドバイスなどいつでも受付中です。よろしく願いします。

第5話 パーティー（前書き）

めちゃくちゃです。ハッキリ言ってやばいです。

第5話 パーティー

「というこで……織斑君、クラス代表おめでとうー！」

「「「「おめでとうー！」「「「

そう言いながらみんなで一齐にクラッカーを鳴らす。これだけの人数が集まると小さなクラッカーの音でも煩く感じる。耳を押さえながら一夏は玄兎に尋ねる。

「玄兎……なんで俺がクラス代表なんだ？」

「朝にも説明した通り、セシリアが代表を断つたんだよ。それで、俺も断つて一夏に譲ったわけよ」

そこまで言うと玄兎はコップに水を注ぎ、それを飲み干す。

「それで、一夏のクラス代表おめでとうパーティーをやるうとなつたわけだな」

一夏がクラス代表になると分かった瞬間から玄兎は数人の女子とともにこの計画を立てた。しかし、さすがはIS学園の生徒、この知らせを聞いた生徒全員がここに駆けつけた。

「一夏の広告力は半端じゃないな」

ここにいる女子は一夏だけが目的ではないのだが、玄兎はそれには気付かない。

「それにしても……よくこれだけ騒げるな」

花の十代、体力だけはある。

「玄兎……よく食うな……」

「ん、そうか？あんまり食ってないような気がするが……」

一夏が恐る恐る尋ねてみると、玄兎は普通に答えてくる。だがその前に置かれている料理の量を見たら誰でもそれを聞きたくなるのは当然だと思える。

玄兎の前に置かれている皿、約10枚以上。それも、大盛りの物ばかり。

「お前ってどんな環境で育ったんだよ……」

「どついう環境って……そんなこと言われてもなー」

こういった会話の途中でも玄兎は食べるのをやめない。

「……ふうー、今日はこれくらいでいいだろ」

「これぐらいって……カレー大盛り三皿、蕎麦大盛り4つ、カツ丼大盛り3つ、それを平気な顔で平らげるお前ってなんだよ」

「俺は至って正常な人間だぞ」

無限の胃袋とはよく言ったものだ、するすると料理が玄兎の胃袋に入っていく様をみながら一夏は苦笑いをするしかなかった。

「はいはい、新聞部です。話題の新人、織斑一夏と赤神玄兎君に特別インタビューしてきました」

「なんか、元気のある人来たなー」

玄兎が呑気にそんなこと言っていると、いつのまにかその人は玄兎の目の前まで来ていた。

「私は2年生の黛薰子です。あ、これ名刺・・・」

差し出された名刺には『IS学園2年新聞部副部長、黛薰子』と書いてあった。

「インタビューって何するんですか？」

一夏が恐る恐る答える。

「ズバリ、代表になった感想を！」

「うーん・・・が、がんばります」

「他にないの？」

「・・・自分不器用ですから」

「古っ！」

「うーわ、前時代だね」

その言葉をメモすると、薫子は玄兎の方を見てくる。

「次は赤神君よろしく」

「代表じゃないんだけどなー、なに言えはいいんですか」

「趣味とか・・・好きな食べ物とか好きな女のタイプとか」

「うーん・・・好きな食べ物は甘い物、好きな女の日のタイプは・・・」

そこで玄兎は気づいた。周りのものすごい視線に……。いつもより数十倍目が輝いているのがわかる。

「えーと・・・優しくて、大人しい人ですかね」

その瞬間、さっきまで騒いでいた女子たちが一斉に静かになった。それも怖いくらいに一斉に。

「あ、あれ？皆さん・・・どうしたんですか？」

忽然と静かになった事に対してもものすごい違和感に襲われる玄兎。

「どうなってんだ？一夏・・・」

「さあ、知らん」

その後、パーティーは静かなままお開きになった。

「疲れたなー、たくつ……」

前半は騒ぎまくってた女子も後半はかなり大人しくなっちゃって、静かなままお開きになってしまった。玄兎はその後一人食堂に残っていた。何故かというと、単に疲れたから動くのが面倒くさいからである。

「あれー？くろむーなにやってるのー？」

ノロノロと歩いてくるのはのほほんさん（一夏命名）こと布仏本音である。彼女はちよくちよく玄兎に会うのだ。それに、玄兎のことを『くろむー』一夏のことを『おりむー』と呼んでおり、どこか抜けた女の子である。

「よー本音、どうした？」

「ちょっと忘れ物ー」

間の抜けた声だが、それでも嫌いになれない性格。玄兎ともすぐに仲良くなった。

「そういえば・・・お前今日パーティーで最後まで何かと行ってたよな」

あの静かになったパーティーの中、唯一最後まで最初と同じテンションだったのが本音だけだった。

元々周りに囚われない性格なのであまりみんなも気にしていなかったのだが、玄兎から見ればかなり目立って見えた。一夏はセシリアと篝のことで手一杯だったので一夏はよく覚えてないだろうが、玄兎はよく覚えてい

る。

「当たり前だよーだってパーティーだからねー」

相変わらず間延びしているのは玄兎はあえて無視する。別に指摘する必要性は感じないからだ。

「ははっ、相変わらずお前はいいやつだな」

玄兎が本音の頭を撫でる。前に廊下でこれをしたらものすごい女子の視線が痛かったのを玄兎は覚えている。玄兎としては自然にしまっただけであって、何の意味もない行動なのだ。

「わーい、くろむーにまた撫でられたー、もつと撫でてー」

「あのな・・・忘れ物取りに来たんじゃないのか？」

「あ、そうだったー」

そして、本音は食堂の隅に行くとともに玄兎の方に戻ってくる。

「あつたのか？」

「あつたよー」

「じゃあ帰ろっぜ」

「あいさー」

そんなことを言いながら食堂を出る。すこし歩くと目の前から二人の女の人が歩いてくる。リボンの色からすると、どつやら3年生と2年のようだ。

「あら・・・本音こんなところにいたの？」

「あ、お姉ちゃんー」

「え、この人が本音の・・・？」

「あ、私は布仏虚、よろしくね、赤神玄兎君」

「え、はい。こちらこそ」

本音とは真逆の性格をしている姉さんに玄兎は心の底からびっくりした。兄弟でここまで違うものかということ。

「（おい、この人本当にお前の姉さんか？全く違うじゃないか）
「（知らないよー、そんなことー）」

「よく言われます、性格は正反対だって」

まさか、聞こえているとはつい知らず、驚きの表情を隠せない玄兎、それに対し布仏兄弟はずっとニコニコしている。

「似ているところあった……」

「でしょう？この子たち昔からここしか似てないのよ」

「でしょうね……え？」

「あら、自己紹介がまだだったわね。私は更識楯無。この学校の生徒会長よ」

「ふーん、そうですね……じゃあ俺は部屋に戻りますね」

「ちょっと待ちなさい！私を無視しないで」

「勘弁してくださいよ。今日は色々あって疲れたんですから」

「あ、ちょっと！待ちなさい！」

だが、玄兎はそのまま自分の部屋に向かって行った。

「覚悟しなさい、赤神玄兎……私をコケにしたツケは必ず払ってもらおうよ」

そのあとの廊下には楯無の笑い声が響き渡っていた。ちなみに、その声で駆け付けた千冬に何故か玄兎が怒られるたのは割愛する。

「赤神君知ってる？転校生の噂」

次の日の朝、玄兎が教室に行くと一人の女の子が話しかけてきた。

「転校生？知らないな」

「実はね2組に転校生が来るって話なんだけど」

初耳だったがそこまで興味が湧かなかった。というのも、転校生がこのクラスにくるならまだしも、他のクラス。別にどうでもいいと玄兎は思った。

「でも、専用機持ちは1組と4組だけだから」

「目指せ優勝！」

「目指せ半年デザート食べ放題！」

あからさまに後者の方が目的なのだろう。でも、転校生だとしたら十中八九代表候補生だということは玄兎にもわかる。なら、これから一夏と対戦する事になるかもしれない。なら、その転校生を見ておく価値はあるだろうと玄兎は考えていたが、却下した。別に玄兎がやらずともあつちの方から宣戦布告とかやってきそうだと思ったからである。ほぼ単なる勘なのだが……。

「その情報……ちょっと古いよ。2組にも専用機持ちが代表になったからね、そう簡単にはいかないわよ」

そこにいたのは、小柄なツインテールの女の子がいた。堂々と教室の入り口に仁王立ちしているその女子は、どうやら1組に宣戦布告をしに来たみたいだ。

(うわぁ……本当に来たよ)

自分の勘がここまであたるとは正直自分でも怖いと思う玄兎。その

女子はこちらに指を向け、高らかに宣言するもんだからクラス中の視線がその女子の方に向いてしまう。

「お前……鈴、鈴か!？」

「そうよ、中国代表」「一夏、お前の知り合いか?」「人の台詞に被せんなああああ」

「ああ、幼馴染だ」

玄兎が一夏の話の聞いてる隣でさっきの女子はまだ何か言ってる。このまま無視するという手もあるがそれだとますます煩くなると思いい、話をそこでやめた。

「ふん、この凰鈴音が直々に来てやってるんだから、ありがたく思いなさいよ、一夏!」

「一夏だけかよ!」

玄兎のツツコミも無視され、さらに一夏と鈴の話は続く。

「鈴、それ似合わないぞ」

「ちよつと一夏!」

「はいはい、その辺にしてくださいね。あまりこの場で二人だけの空間に入らないように」

「あ、すまんすまん」

さすがに限界の玄兎はそこまでで一夏の話を止めた。これ以上行ったら完全に置いてけぼりくらう、絶対に。

「ではっ、その前に自分の教室に戻ってもらおうか」

「げっ、呂布？」

ズドンッ！

「誰が三国志の猛将か」

そこに立っているのは黒いスーツに身を包んだ、千冬だった。その千冬を見ると渋々鈴は戻っていく。相当苦手なのだろう。明らかに顔が笑ってなかった。

「さて、SHRを始める」

千冬はさっきの一件がなかったかのごとくHRを始めてしまった。

場所はお昼休みの食堂。玄兎はいつものごとく隣に本音を連れて一夏の隣の席に座る。いつもは一夏と同じ席なのだが今日はいつもと違って、今日はなんだかあそこにいるのは危ない気がした。

「ねーねー、くろむー。おりむーなにやってるのー？」

「あのね、あれは『女の争い』っていうだよ」

「そうなんだー」

少し違うような気がするが玄兎はそんなことは気にはしていない。

「にしても……本音はそれだけで大丈夫なのか？」

「私は大丈夫なのだー」

「……まあ、いいか」

そして、そのままペロリと昼食を食べ終わる。その時間およそ5分。

「さーて、一夏はまだかかりそうだな。何をしようかなー」

「あ、そういえばー、会長がくろむー来いーって言ってたよ」

「会長……？」

玄兎は記憶の中を探ってみるが会長という単語に聞き覚えがない。とりあえず本音が食べ終わるのを待って、その「会長」とやらが待つ場所へと向かう。

「来たわね……」

玄兎が廊下を歩いているとそこには仁王立ちしている、2年生が立っている。しかし、玄兎と本音はそのまま通り過ぎてい

「ちょっと、待ちなさい……なんで、通り過ぎていくのかな？」

「いや、「会長」とかいう人に呼ばれたので、急いでるだけなんですけど」

「私が「会長」よ！しかも、本音もどさくさに紛れて通り過ぎない
」！」

「えへへ、ごめんなさい」

「で……会長さんが何か用ですか？」

「あなたに先日やられた借りを返しに来たのよ！」

「そうですか……」

「もうちょっと、テンション上げなさい！」

「でも……」

「……やりづらい」

この後、虚が合流し、何とか話ができた玄兎と楯無。

「それはそれは……すみませんでした」

「謝ればよし！」

「じゃあ、これで……」

「待ちなさい！」

「なんですか？」

「何でもないけど」

楯無の小さな仕返しの直後、玄兎が楯無に飛び膝蹴りを食らわそうとするが楯無にあっさり躲されたのは此処だけの話だ。

第5話 パーティー（後書き）

最期の方は完全に力尽きました・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5402z/>

IS～インフィニット・ストラトス～死神の黒兎

2012年1月4日02時48分発行